

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆応募論文から◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ガバナー賞

SI 下関 推薦 梅林学院高校 2 年 尾瀨 千咲

私には「音楽教師になる」という夢がある。音楽の表現に楽しさや、音楽を通して人と心をつなぐことができる喜びを、多くの人に伝えたい。また、学校というその人の生き方の根本が決まるところで、これからの生き方を探る生徒たちのサポートをしたい。音楽の力を伝えることで、生きる力を与える教師になりたいのだ。そこで改めて「夢を叶える」ということについて考えてみた。

私の夢への思いを一層強めたのが、橋本るつ子先生との出会いである。先生は 31 年間音楽教師をされた大ベテランで、先生の明るく大らかな人柄に私は何度も助けられた。先生は学生のころからパイプオルガンを弾きたいという強い思いを持っていて、中退と一浪を経験後、ついにその夢を実現した。そして教員免許を取得したが、卒業後は教師にはならなかった。その大学でご主人と出会い、結婚したからだ。しかし、ご主人は結婚七年目に癌で亡くなってしまった。先生は絶望した。だが、それが音楽教師として歩む新しい人生の契機となった。そして、先生は私たちに音楽の力を教えてくださった。先生にとって音楽の力とは、「生きるためのパワー」だと思う。また先生は私に「何のため、だれのために音楽をするのが大切」とおっしゃった。先生自身は「神様への感謝を込めてオルガンを弾いていた」と語ってくださった。

私も自分が音楽をする意味を考えてみたが、まだ明確な答えはない。しかし、先生のお話から、仕事の意味や目的を明確にし、自分以外の何かのために働くことの喜びを教えられた。「きっとあなたなら見つけられる」という先生の言葉を胸に、これからの学びの中で、私の答えを見つけない。

このように、私を含めて夢を追いかけることのできる現代の女性は恵まれている。戦後の貧しい時代、女性は高校に行くのも困難であった。私の祖母も例外ではなかった。結婚してからは祖父の仕事のサポートと子育てで、自由な時間は皆無だった。祖母は女性であったが故に、幾つもの夢を諦める他なかったのである。

現代では、女性でも学びたいことが学べる環境が整備されている。男女雇用機会均等法や産休・育休に関する法律が制定され、女性の社会進出も進んでいる。しかし、一方で問題もある。母親が社会に出ていくに伴い、待機児童も増加、そして家族のふれあいが減ることで、子供は寂しい思いを抱きながら成長することもある。これらの問題の一番の要因は、日本で根強く残る「家事や育児は女性の仕事である」という意識だと思う。最近では家事や育児に率先して取り組むイクメンも現れている。しかし、他の先進国に比べても、日本の女性の家庭における仕事量は圧倒的に女性に多い。女性が夢を生きるには、日本人に定着した意識の改善、そしてそれを支える社会体制が必要だ。男性も女性も互いに補い合い、夢を生きることのできる社会を、私たちは作っていかなくてはならない。